
夢

はるやん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【Nコード】

N6506Y

【作者名】

はるやん

【あらすじ】

ほんとうに見た夢です

目を開けると、そこは真つ白な世界。

霧が辺りを曇らせ、何も見えない。

今、自分がどういう体勢なのか、分からない。

多分、立っているのだろう。

しかし、それにしても足が軽い。

ただ、足を動かせば前へ進む。

それは不思議な感覚。歩いているとも違う。

歩く。歩く。

どこまで行っても辺りは霧に囲まれている。

立ち止まると、正面に人影。

それは幼い少女で、白いワンピースを着ている。

膝に顔を埋め、体が小刻みに震えている。

耳を澄ませば 自分に耳があるか、分からないが

微かに啜り

声が聞こえる。

どうしたの？

そう聞こうと口を動かしたが、声が出ない。

「あゝあゝ・・・」

声にならない思いを少女に投げかける。

向こうもこちらに気付いたのか、僕を見つめ不思議そうに首を傾げる。

どこかで、見たことのある顔。

何か言いたそうな、そんな表情をしている。

「ほう」

少女は苦しそうに声を出そうと口を開け閉めしている。

しかし、実際出ているのは声ではなく、醜い喘ぎ。

僕が近づくと、少女は脅えたように後ずさる。

怖がらなくてもいいよ

言いたいことが言えない・・・
それはとても辛いことだった。
そうして幼女がどこか、霧の中に消えていった。

僕は、また一人。

寂しくはない。

元の状況に戻っただけ。

その後、白い世界を探索する。

探索と言っても、永遠と同じ光景が続くだけだからつまらない。
それでも、宙^{そら}を歩くような感覚はとても優雅だった。
ふわふわ、まるで空を飛んでいる鳥だ。

今なら飛べるかも

馬鹿な考えだとも思った。

しかし、今なら出来そうな気がする。
そこにいつもの僕はいなかった。

足に神経を集中させ、地面を蹴るようにしてジャンプする。
すると高く跳ね上がり、落ちない。

宙に浮いている。

「不思議だ」

声が出た。

僕は、昇る。ぐんぐん昇る。

これは、夢？

そんな疑問が僕の頭の中に浮かんだ。

すると、急に不安な気持ちが僕を襲う。
怖い。下りたい・・・

僕はあるのかも分からない地面を目指して、落ちた。
どこまでも、落ちた。

地面には辿り着けない。
それでも落ち続ける。

ところで、僕は何故落ちている？
分からない。

落ちるのをやめてみる。
すると、次は上がどっちか分からなくなる。

今、僕はどの方向に進んでいた

そんなことさえ、真っ白な世界では見当がつかない。

そしてまた、歩き始めた。

するとまた、幼女がいた。

否、先程の幼女より大きい。

しかし顔は同じだ。

少女は泣いていた。

「何故泣いているの？」

僕は声を出せた。

嬉しかった。

やっと言いたいことが言えた。

少女は無理に笑い、

「大丈夫だよ」

と呟く。

どう見ても大丈夫なようには見えなかった。

さらに僕は言う。

「そっか。じゃあ泣かないでよ」

少女は特別卑屈な笑顔を作って、消えた。

何で消えたのかな、

でも自分の言いたいことが言えたから良いか。

僕は心に出来た隙間を無理やり埋めた。

また、一人だな。

少し寂しい。

何故だろう・・・

元の状況に戻っただけなのに。

呆然と立ち尽くしていると、少女が現れた。

しかし、少女の背丈は僕と同じくらい。

やはり目は赤く、腫れていた。

「どうしたの？」

僕は彼女に尋ねる。

「大丈夫」

彼女は、先程少女が僕に向けた卑屈な笑顔と同じ顔をした。

どこか、腑に落ちない。

「本当に？ 何かあったなら言って」

言葉は強く、彼女は困ったような顔をした。

「もう、いいの。心配してくれてありがとう」

彼女は、心からの笑顔を涙と共に僕に見せた。
そして、消えた。

また、一人。

一人には慣れている筈なのに、何故だろう。
寂しい。

涙が頬を伝った。

僕は、朝を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6506y/>

夢

2011年11月20日04時10分発行